



ハム太郎号



第198号

発行日：令和二年7月1日

発行者：医療法人 博愛会

福田脳神経外科病院

院内情報委員会

診察室から くも膜下出血

院長 福田 雄高

脳神経外科が関わる重大な病気の一つは、なんとといってもくも膜下出血です。時に親戚の方が、職場の方が、知り合いが、くも膜下出血になったなどないでしょうか？あるいは、近い家族がなった方もおられるものと思います。

但し、くも膜下出血になったけれど元気にしているよ、あるいは後遺症が残って大変だよとか、あるいは非常に残念ながら亡くなられた方もおられるかと考えます。いったいくも膜下出血とはどういう病気なのでしょうか。

くも膜下出血は、基本的に脳の動脈に瘤（こぶ）があつて、その瘤が破れてしまう病気です。報告は様々ですが、人口10万人あたり、年間に20人程度の破裂率とされています。佐賀市の人口が20万人程度とすると、年間に40人程度破裂している換算になります。好発年齢は40-65歳も、高齢化に伴い、高齢の方の発症も多く、また若年でも発症することがあります。

瘤の大きさ（基本5～7mm以上）、瘤がある場所、いびつな形、増大傾向にあることが、主な破れやすい危険因子です。また高血圧、大量飲酒、喫煙、血のつながった家族にくも膜下出血の方がいること（家族歴）、瘤が複数あることなども危険因子になります。

一旦破れると、その死亡率は30-50%に及ぶともされています。1/3の方は、なんとか破れても社会復帰できる方がいる一方で、1/3の方は、麻痺や失語、認知機能障害など後遺症が残ってしまいます。

なぜ重症になるかという、脳の動脈が破れると、くも膜という、脳の表面に張っている薄い膜の内側に、血液が漏れるというより、非常に勢いよく噴出するからです。幸い運が良く、破れる程度が軽かった方は、かさぶたが瘤の先に付着した様な状態で、病院にたどりつき、再破裂予防の治療に間に合う方がおられます。非常に残念ながら間に合わない方もおられます。

破れてしまうととんでもないことになります。なんと
いっても破れる前に、処置できるものならば処置しておいた
ほうがよいかということになります。

但し、ここで問題なのは、果たしてどれぐらいの確率で
動脈瘤が破れるかです。動脈瘤が見つかり、破れる確率は
非常に低いのに、不安だけが募ることも多々認めます。
それでは脈動脈瘤を調べるのにどんな検査をするのか
（診断）、そしてどんな治療法があるの
でしょうか。（次回に続く。）



有明海 穏やかで、平穏な時間を
過ごしたいものです。